

てづくり味噌(山河自然工房 version)

2024(令和6)年11月26日
市井の人 山河自然

本書は、てづくり味噌に関心を持ちながらも、もう一步踏み出せないでいる方向けに書いています。特に男性を意識して書いています。男性は、目分量が苦手です。この為、手順と数量等々を出来るだけ詳細に書いています。それを参考にしつつ、あとは自分の感性で「挑戦」してみてください。

結果は、驚くほど正確に出てきます。その指標は「カビの発生」と「味」です。これほど正確に反映してくれる結果は見当たりません。

是非、面白がって挑戦してみてください。半年後あるいは1年後に「至福の時」か「うな垂れる時」という未知の世界が待っています。

全行程に共通すること

- ・麴による発酵を下に味噌が出来ます。最大の敵は雑菌(カビ)です。この為、手指を清潔にすること及び使う用具の熱湯消毒は、大前提になります。
- ・男性の場合は、台所を汚してしまうことが多々あります。わずかな汚れでも「山の神様」からお叱りを受けます。細心の注意を払って、使う前の状態に原状復帰を心がけて下さい。
- ・台所を離れない。長い時間煮ていたりします。火を使っているので常に台所のそばを離れないように心がけることも大切です。
- ・道具の吟味は、二回目以降でも良いと思います。一度やってみると、必要なものとそうでないものが何となく分かってきます。それからしっかりした道具を揃えても遅くはないように思います。
- ・私は、味噌を入れる容器に「陶器製のかめ」を考えていました。現時点では過剰投資のように思っています。カビを出さない味噌をしっかりつくれるようになってからで十分と考え、今回は味噌屋さんで売っていたポリ桶にしています。
- ・煮豆の粉碎は、当初には、手又は足で行おうと考えていたのですが、これは少量の場合のみで、ある程度の量になると無謀の方法と言えます。「ミンサー」は必須と思います。
- ・事前に用意したものの他、途中で気がついて補充したものなども含めて掲載しています。
- ・本書は、OOC お世話係代表鈴木様、Narita マルシェ代表増田様、大谷様等々のご助言を加えながら作成しています。感謝の気持ちを込めてここにご紹介いたします。

○材料調達(2024(令和6)年11月23日)

・藩政時代からの麴屋「佐藤麴味噌醤油店」(仙台市太白区荒町)から材料を購入しています。

○1年分の量

・1年分の量の計算基礎

味噌汁に必要な味噌の量は、水分量から計算すると、水分量の約7~8%が目安となります。1人分の分量が200mlの場合は、14~16mlとなるため、大さじ1杯程度となります。大さじ1は15mlになります。これをg換算すると水の場合は15gになります。ここでは比重を無視して15gとして計算しています。

15g/味噌汁一日1杯×2人×20日×12ヶ月/1年分=7.2kg **約8kgを1年分と計算**

・1年を通して食べられるようにする為に、今回は2年分の材料を準備しています。

○材料の調達した量

・大豆2キロ、麴2キロ、塩(伯方の塩)1キロ、ポリ桶1個=1年分×2組



ここから作成工程

○大豆を水につける(2024(令和6)年11月24日)

・大豆を五回ほど水で洗います(マニュアルでは三回)。

・結構汚れています。理由は分かりませんが、水洗いすると白い細かな泡が出てきます。

・大豆と大豆を擦り付けるようにして洗います。始めは、水を大豆全体が浸る程度の水で、米をとぐような感じで洗います。その後、水を増やして水の中で大豆が大きく動き回れるようにして洗います。

・これを3回から5回繰り返します。

○大豆を水に浸ける

・たっぷり(材料の3倍)の水に一昼夜浸す(マニュアルには18時間以上とあります)。

・大豆が2倍くらいにふくれます。

・1時間程度の間隔を目安にして、水が吸われて減っているのを補充します。

・大豆2キロは、使用したポリ桶の3分の一程度に収まります。これが、水に浸けると2倍から3倍近くまでふくれます。写真は、だいぶ水を吸ってふくれた状態の様子です。

・ポリ桶の購入は、そのことを想定して準備する必要があります。

・大豆に麴・塩を加えた味噌の出来高を想定したポリ桶が必要です。

・今回は、味噌の出来高8キロを想定しているので**10キロ用のポリ桶を準備**しています。



○煮る 其の一 (2024 (令和6) 年 11 月 25)

- ・大豆が隠れるまでの水で 3 時間煮る。
- ・マニュアルでは、3 時間とありましたが、ここでは 3 時間 30 分煮ています。
- ・お味噌屋さんのお話では、てづくり味噌のコツは、「麴選びと豆をしっかり煮ること」と、言われました。そこで、麴は藩政時代からの麴を使い、大豆はしっかり柔らかくなるまで煮ています。具体的には、親指と小指でつぶせる堅さ等々と言われています。
- ・沸騰するまでは強火。それ以降は中火にします。中火とは、鍋の中でブクブクと水蒸気の気泡が出ない程度のことかと思えます。95℃に保つ等の解説もあります。
- ・水を差しながら大豆が露出しないように保つ。大きい煮鍋がなかったので、結構頻繁に少量ずつ水を加えました。その際、大豆に温度差のムラが出ないように、お玉?で軽くかき混ぜています。
- ・「お豆のご機嫌をとって下さい」と助言を頂きました。

○煮る 其の二 アクを取る

- ・煮始めてから約 30 分までは、白い気泡状のアクが多く出ます。見張っていないと吹きこぼれます。台所を汚して「山の神様」に叱られる原因になります。
- ・アクを適宜取り除く。この間、台所は離れられません (汗)。



○備品補充

- ・次の段階に備えて、助言して頂いたミンサーや重しを購入。
- ・台所を汚すな!と言われるのでバット?を購入。このひらめきはヒットでした。これがあって、居間のテーブル付近の汚れを最小限に食い止めることが出来ました。
- ・重しは、内容量 (想定味噌の量) の 3 分の一程度とあり、この為、3キロの重しを用意しています
- ・ミンサーは、道具に凝りたい私としてはステンレス製のしっかりしたものを買ったのですが、直ぐには手に入らないことから、近くのホームセンターを探し回り、簡易版のミンサー (3,000 円程度) を購入しています。結果的には、これで良かったと思います。機能的には全く問題はありません。



○糀の塩切り

- ・豆を煮ている間に糀の塩切り(塩麴)をつくる。
- ・麴2キロに塩800グラムをまぜる。他に100グラムから200グラムは仕上げのカビ防止に使う。
- ・日本全国で作られる味噌は、1年未満の熟成で塩分濃度は10%~12%と言われています。
- ・この為、味噌の出来高8キロの塩の量は800グラム+ α にしています。
- ・塩の量は、カビ対策に重量なので、「甘めにしたい」等の理由で塩を少なくするのは良くないとありました。
- ・甘めの味噌を造りたいときは、麴の量を増やすとあります。
- ・少し固まっている麴を手で砕くように、そして両手ですり合わせるようにして細かくします。
- ・麴をお米一粒状程度まで砕いてから塩を絡めます。
- ・とても簡単な作業です。でも、指先(爪の根本の皮膚)のささくれには要注意です。しみます。



○煮る 其三 取り出し

- ・ボールに取り出し、水洗いして、冷ますのを兼ねます。
- ・水で粗熱を取る方法は、賛否のある所です。
- ・時間をおかずにミンサーで砕くのが良いとされています。
- ・今回は、水洗いして冷ます方法と水を張ったボールに砕いた材料を入れたボールを入れて冷ます方法の二通りで試しています。

○ミンサーで豆を砕く

- ・当初の予定では足で砕くつもりでしたが、助言を受けてミンサーに切り替えました。これは正解!
- ・豆を砕く作業はとんでもなく大変です。
- ・細かい目のディスク(出口)を使いました。想像以上に、なめらかに砕かれて出てきます。味噌団子を作るときに、とても楽に出来ます。
- ・ミンサーを固定する為に吸盤が付属しています。これがしっかり機能して固定されないと作業が上手く進みません。
- ・ステンレステーブルに直接置く等、吸盤が機能する場所で行うことが大切です。
- ・多少、豆が散らばります。台所の下に落ちると見逃しがちになります。注意が必要です。



○糀の塩切り(塩麴)と砕いた豆を混ぜ合わせる

・大きなバットを購入したのは正解でした。それでも、机の周りに材料を散らしてしまいました。

・大豆2キロと麴2キロに塩800グラムを一度に入れたのが失敗の要因かも知れません。

・2回に分けた方が均一に混じるように思います。

・今回は、何処まで混じったかちょっと自信がありません。

・二回目の時は、砕いた大豆と糀の塩切り(塩麴)を交互に

重ねて、その上で混ぜ合わせるようにしました。この方法だと、だいぶ混じり具合が良いように思います。(写真は、何の手立てもしない混ぜ方と成果品)



○団子状にこねる

・パサパサもせずかといってねばねばもせず、適度なねんどの味噌団子が出来ました。

・味噌団子をポリ桶の底に投げつけるようにして入れます。これは、空気を入れないようにする為です。この工程の全てで「美味しくな〜れ!」と、願いを込めることが大切と教わりました(増田師匠)。

・味噌団子でポリ桶の底が見えなくなったら、拳をつくって平らにつぶしていきます。

・ポリ桶の縁を廻る様に押していくと、きれいに仕上がります。

・平らになった所で、再度味噌団子を投げ入れます。

・これを何度も繰り返します。

・潰した豆は、冷え切らないうちに丸めて味噌玉にして仕込むのが「コツ」です。豆の温度は30度〜40度くらいあっても糀とまぜ合わせて大丈夫なので、冷たくならないうちの方が柔らかくて扱いやすい(鈴木師匠の受け売り)。

・最後にもう一度、拳をポリ桶に沿って廻る様に押し付け、真ん中が少し高くなるように仕上げます。



○封印 其の一

- ・蓋をする前には、きちんと冷まして、容器についた水滴などを拭いて周りを消毒する。
- ・糀が元気に働きだす前は、カビ菌に負けやすいので、細心の注意を払う。
- ・外からカビ菌が最も入り込みやすい、ポリ桶と仕込み味噌の付け根に軽く塩を振ります。
- ・最後に、ラップを味噌に密着するように掛け、出来るだけ外の空気との接触を遮断します。
- ・蓋をしてその上に3キロの重しを置きます。
- ・ここまでで蓋の中の処置は終わりです。



○封印 其の二

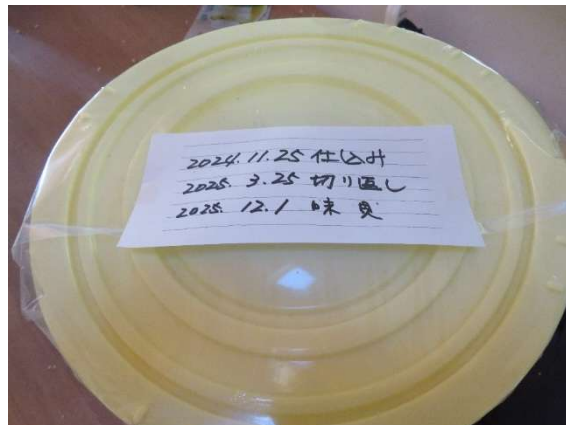
- ・蓋を掛け終わったら、今後の予定を書き込んだメモを見えるようにして添える。
- ・全体を新聞紙やビニール袋で覆って、ヒモで括り、空気を遮断(カビ菌侵入を防ぐ)します。

○収納

- ・日光の当たらない場所、室温・湿度の高くならない場所に置き、熟成期間を静かに待つ。

○今後の予定

- ・仕込み完了 2024(令和6)年11月25日
- ・切り返し 2025(令和7)年03月25日 4ヶ月目で熟成状態を均一にする天地返し
- ・味見 2025(令和7)年12月01日 1年熟成の予定



本レポートは、OOC お世話係代表鈴木さん及び増田さんの手ほどきを受けて火が付いた「手づくり味噌」づくり。今度は、自力で行おうと、齢(よわい)の挑戦として行ったものの記録です。

来年、再来年と回数を重ねる毎に、「美味しいお味噌」をつくれるようにしたいと考え、その時々での作り方を記録して、次回の改善点や新たな挑戦の箇所を見いだすべく、その参考に記録しています。皆様にも何かの参考や一歩を踏む出すきっかけになってもらえたら幸いです(2024|126)。